

日常的活動のなかの音楽の観察

——練習場面におけるエスノメソドロジーを中心に——

[要約]

吉川侑輝

目次

凡例

はじめに

第1章 序論

- 1.1 本論の目標と本章の目的
- 1.2 科学と日常
- 1.3 非専門家と専門家
- 1.4 エスノメソドロジー
- 1.5 本論の目的

第2章 先行研究——練習場面における演奏分析にむけて

- 2.1 本章の目的
- 2.2 先行研究
- 2.3 研究の概要
- 2.4 分析
- 2.5 議論
- 2.6 小括——練習場面における演奏分析にむけて

第3章 技術についての注記——想起としての分析

- 3.1 本章の目的
- 3.2 先行研究
- 3.3 エスノメソドロジー研究における技術
- 3.4 「精巧なリマインダー」としての技術
- 3.5 議論
- 3.6 小括

第4章 練習場面におけるエスノメソドロジー (1)

——アンサンブルにおける演奏の提案

- 4.1 本章の目的
- 4.2 先行研究
- 4.3 データとトランスクリプト
- 4.4 分析
- 4.5 議論
- 4.6 小括

第5章 練習場面におけるエスノメソドロジー (2)

——相互行為としてのチューニング

- 5.1 本章の目的
- 5.2 先行研究
- 5.3 データとトランスクリプト
- 5.4 分析
- 5.5 議論
- 5.6 小括

第6章 練習場面におけるエスノメソドロジー (3)

——ひとりでおこなう練習の理解可能性

- 6.1 本章の目的
- 6.2 先行研究
- 6.3 データとトランスクリプト
- 6.4 分析
- 6.5 議論
- 6.6 小括

第7章 結論

- 7.1 本章の目的
- 7.2 演奏分析——現象の日常性・言語性・複合性
- 7.3 議論——演奏分析と会話分析
- 7.4 結論——日常的観察と科学的観察
- 7.5 課題と展望
- おわりに
- 文献

第1章 序論

音楽という現象を対象化しようとする専門的な研究者たちはこれまで、さまざまな手立てを利用しながら、この捉えがたい現象を、いかにして観察するかということに、いわば理論的な関心のもとで取りくんできた。これに対して本論が取りくむのは、研究の対象となっているような音楽に従事する人びとが、その日常的活動における実践的な関心のもとで、そもそもどのように音楽という現象を「観察」しているかということそれ自体を明らかにするということである。具体的には、ひとつの日常的活動としての「練習」場面を主要なフィールドとしながら、人びとが「演奏」をつうじて音楽を組みたてていくときに利用しているさまざまな慣習的方法（プラクティス）を明確にする、という作業をすすめる。このような、演奏において利用されている人びとの方法論をあらためて明確にしていくという作業をつうじて本論は、音楽という現象がどのような特徴を持っている現象であるかについての見解を提示する。本論は併せて、そのような知見の音楽に関心をもつ専門的研究ならびに日常的関心への貢献可能性や、その展開可能性を議論していく。

まず、第1章から第3章では、本論が経験的研究を遂行するための、予備的な作業をおこなう。

第1章「序論」の議論は、以下のように構成されている。1.1ではまず、音楽という現象の特徴を提示するという本論の目標と、それを遂行するための方針を考察するという本章の目的を明確にする。1.2では、本論の方針を明確にしていくための足がかりとして、音楽の科学的な観察と日常的な観察の関係を論じる。具体的には、科学的な観察が日常的な観察をその論理的な前提としていることを論じた上で、後者を明確にしていくことの意味を考察する。つづけて1.3では、音楽の日常的観察それ自体を観察するという方針を、音楽の非専門家（いわば素人）による観察というよりは、その専門的な（いわば音楽家による）観察を明確にしていく方針において進めていくことの正当化が行われる。併せて、それが決して困難な方針ではないということ、あるいはそれが困難な方針でもありうるとしたときに、それがいかなる意味において「困難な」方針でもありうるかといったことを論じる。1.4では、音楽の日常的な観察それ自

体の観察を遂行していくための方針として、エスノメソドロジーという方針が提示される。最後の 1.5 では、それまでの議論をふまえながら、次章以降において具体的な研究を進めるための準備をおこなう。具体的には、音楽の日常的な観察のあり方を明確にするために、本論が音楽の「演奏」という活動に着目することや、「練習」場面というフィールドに目を向けることが述べられる。

第 2 章 先行研究——練習場面における演奏分析にむけて

第 2 章「先行研究——練習場面における演奏分析にむけて」の目的は、音楽にかかわるさまざまな活動におけるエスノメソドロジーを対象とした既存の研究を概観することをつうじて、研究それ自体が備える特徴や、それをうけて本論がとるべき方針を明らかにすることである。こうした作業をつうじて、音楽にかかわる活動のエスノメソドロジー研究が、特に近年、実に多様なフィールドにおいて展開しているだけでなく、発話などを利用しながら練習場면을組みたてていくためのやりとりや、楽器演奏を利用しながら音楽を組みたてていくためのやりとりといった、さまざまな現象を対象としていることを明らかにする。こうした作業をおこなったうえで本論は、練習場면을フィールドとして、人びとが演奏を組みたてていく方法を明確にするという課題——こうした課題を、「会話分析」に対して「演奏分析」と表現することもできるであろう——を設定することによって、音楽にかかわる日常的な活動の編成それ自体を探究していく、ということを論じる。

本章における検討は、次のように進められる。まず 2.1 で本章の目的が設定されたのち、2.2 では、本章の検討作業に先だって、音楽にかかわる活動のエスノメソドロジー研究が、これまで、どのように特徴づけられてきたかを確認する。2.3 では、音楽にかかわる活動のエスノメソドロジー研究の通時的展開を概観し、既存の研究が、これまでいかなるフィールドや研究手法をつうじて遂行されてきたかを明らかにする。2.4 では、いくつかの研究を検討することで、これまでの研究が明らかにしてきた現象が、活動において利用される資源や活動を構造化する方法がそなえる特徴の観点から、いくつかのタイプを構成していることを明らかにする。2.5 では、それらのタイプのうちのひとつを「演奏分析」と表現したうえで、こうしたひとつのタイプが明確に

なることの含意を、2.2 における既存の議論とのかかわりにおいて論じる。そのうえで、2.6 では本論が、音楽にかかわる日常的活動の編成を明らかにしていくという課題を遂行するために、練習場面における演奏分析に取りくむことが論じられる。すなわち、音楽にかかわる活動におけるエスノメソドロジーを対象としたこれまでの研究の大部分は、会話分析として遂行されてきた。こうした研究は、練習やそこにふくまれるさまざまな相互行為単位がそなえる構造を明らかにしてきた。会話分析による研究が明らかにするのはいわば、人びとが、練習をどのように観察しているかということである。それに対して、本論が演奏分析を遂行することは、人びとが音楽をどのように観察しているかを明らかにすることを可能とするはずだ。本節で論じられるのは、以上のようなことである。

第3章 技術についての注記——想起としての分析

本章の目的は、エスノメソドロジー研究において利用されている「記録」、「転記」、そして「収集」にかかわるさまざまな人工的な技術が備える方法論的な地位を明確にすることをつうじて、音楽に関心をもつ研究者たちが、こうした人工的な技術を、研究対象となっている日常的な活動を明らかにするという目的のために利用するという方針を、予め擁護しておくことである。より具体的には、この章では、エスノメソドロジー研究における認識論的な議論を収集・分析することで、研究者たちが日常的に——むろん、それでいて専門的に——利用しているようなさまざまな人工的な技術と、それによって探究されているような日常実践との関係を、見通しのよいかたちで記述することを試みる。音楽を探求する専門的な研究者たちは、その活動において、ビデオカメラや録音機材を利用すること、トランスクリプトを作成すること、そしてデータ集を構築することなどの、人工的な技術を利用するであろう。しかしながら、しばしば指摘もされているように、一見すると、こうした人工的なテクノロジーの利用と日常的な活動を探求することの間には、困難な関係が存在しているようにもみえる。これに対して本論は、エスノメソドロジー研究者たちが人工的な技術を利用することによって従事しているのが、日常実践の詳細を効率よく想起することを

支援するというにすぎない、ということ、ゆえにこうした人工的な技術と日常的活動の探求とが、決して矛盾はしないということを主張する。

3.1 ではまず、研究者が利用する人工的な技術に対する古典的な批判を紹介し、本章の目的を提示する。3.2 では、音楽のエスノメソドロジー研究における方法論的な議論を紹介し、それらがエスノメソドロジー研究におけるデータの利用の正当性を主張しつつも、その認識論的な議論を行っていないことを論じる。3.3 では、会話分析における人工的な技術利用の概況を記述し、それが研究活動において不可欠なものとなみなされていることを明確にする。つづく 3.4 ではまず、エスノメソドロジー研究における人工的な技術を批判する立場と、それを擁護する立場を紹介したうえで、後者が前者の批判に対して十分に回答していない可能性を検討する。そのうえで、エスノメソドロジーの認識論を哲学における概念分析との関係において論じる議論を紹介することによって、前者への応答を試みる。3.5 では、これまでの議論と 3.2 において紹介された議論との関係の整合性を論じる。最後の 3.6 では、本論において人工的な技術を利用することの正当化が行われ、その含意が論じられる。

第4章 練習場面におけるエスノメソドロジー (1)

——アンサンブルにおける演奏の提案

第4章から第6章では、第1章から第3章の議論をふまえたうえで、練習場面における経験的調査にもとづいた演奏分析がおこなわれる。

第4章「練習場面におけるエスノメソドロジー (1) ——アンサンブルにおける演奏の提案」では、アンサンブルのリハーサル場面をフィールドとして、演奏の開始直前における人びとのやりとりに着目する。そのような場面の分析をつうじて本論は、音楽家たちが、{1} 演奏の提案、{2} 楽器の準備、{3} アインザッツの提示、そして {4} 演奏という4つの部分からなる連鎖構造をさまざまに「変奏」しながら、演奏における「同期 (synchrony)」の達成という課題に取り組んでいることを例証する。このようにして本章では、音楽における同期が人びとにいかなる課題を要請しているかを明確にしていく。

本章の議論は、具体的には、以下のような理路をたどる。まず 4.1 では、演奏を開始する直前における同期の分析をおこなうことの重要性を主張する。つづく 4.2 では、先行研究の検討をおこなったうえで、本論が第一に、オーケストラやアンサンブルといった合奏のリハーサル場面に着目することによって相互行為の参加者たちが演奏を同時に始める場面に焦点をあてること、第二に、会話と音楽の境界部分に着目することによって、会話が終わり、合奏が始まるまさにそのときに何が起きているかを明らかにするといった方針をとることを説明する。4.3 では、本論がビデオ収録をおこなった「オーケストラ・アルファ」と「アンサンブル・デルタ」（いずれも仮称）についての概況を述べた上で、本章の方法論についての注記が行われる。4.4 では、データの分析を通じて、音楽家たちが、{1} 演奏の提案、{2} 楽器の準備、{3} アインザッツの提示、そして {4} 演奏という 4 つの部分からなる連鎖構造を変奏しながら、同期の達成という課題に取り組んでいることを例証する。4.5 では、このプラクティスの特徴についての考察を行い、そのプラクティスの演奏場面における合理的特性を論じる。4.6 では、本章における議論を小括としてまとめた上で、今後の研究の展望について言及する。

第 5 章 練習場面におけるエスノメソドロジー (2)

——相互行為としてのチューニング

第 5 章「練習場面におけるエスノメソドロジー (2) ——相互行為としてのチューニング」では、音楽活動における「ピッチを合わせること (pitch matching)」という基盤的な現象がいかにして達成されているかを、音楽家自身が従事しているひとつの日常的な課題にそくして特定する。この章では、「ピッチを合わせること」の社会性を解明するために、アンサンブルにおけるチューニング場面に着目する。具体的には、複数人でおこなわれるチューニング場面のビデオデータとその断片から作成されたトランスクリプトを利用することで、音楽家たちが、チューニング活動のただなかにおいて、自らの楽器における音高がすでに調整されていることを標示するための表現形式——本章においてこの表現形式は「n+n+s」と (要約的に) 表現されることになる——が利用されていることを例証する。こうして、チューニング活動においてとりく

まれているひとつの技法が明確にされることで、「ピッチを合わせること」がそなえる社会性が特定しなおされる。

チューニング場面の相互行為を明らかにするために、本章では、チューニング場面を収録したビデオデータの分析を試みる。分析に用いるのは、著者が2015年の3-8月にかけて国内で実施したフィールドワークを通じて収集したビデオデータの一部である。本章は特に、8月にK県で実施されたリハーサルを収録した40分弱のビデオデータの分析を行う。

本章の議論は、以下のように進められる。5.1において本章の目的を述べた後、5.2では、既存の相互行為分析が、音楽家たちがピッチを合わせることを志向している場面を分析対象として扱ってはいるが、ピッチを合わせることの特徴それ自体が探求されているわけではないことを確認し、本章の意義を明確にする。5.3では、分析対象となるデータについての概況を述べた上で、本章の方法論についての注記が行われる。5.4では、データの分析を通じて、音楽家たちが、チューニングにおいて「n+n+s」と要約可能なプラクティスをその活動の中で体系的に用いていることを例証する。5.5では、この「n+n+s」というプラクティスの特徴についての考察を行い、そのプラクティスのシンプルさが、チューニングという活動の遍在性や可変性と関係している可能性について議論する。5.6では、本章における議論を結論としてまとめた上で、今後の研究の展望について言及する。

第6章 練習場面におけるエスノメソドロジー (3)

——ひとりでおこなう練習の理解可能性

第6章「練習場面におけるエスノメソドロジー (3) ——ひとりでおこなう練習の理解可能性」では、ひとりでおこなう演奏の公的な理解可能性を解明していくことをつうじて、ひとりでおこなう「練習 (practice)」の特徴を明確にしていく。本章では、こうした課題を遂行するために、本論の著者みずからの練習場面を対象として、ひとりでおこなう演奏のビデオデータを分析する。より具体的には、こうした分析をつうじて、即興演奏において適切な旋律を産出することや演奏における誤りを訂正するためのさまざまな規則が、練習のなかのひとつのふるまいにおいて、多層的に利用され

ていることが明らかになる。そのうえで本章では、ひとりでおこなう演奏が、潜在的には他人にもまた理解可能なかたちで編成されているのでなくては目下の練習が自分自身でも理解可能なものとはならないことや、演奏がそなえるそのような特徴が練習という活動の特徴をかたちづくっていることを主張する。

以上の課題に応えるために本章は、現実に行われた個人的な練習場面の分析を試みる。より具体的には、本章の著者自身による、ピアノを用いたジャズの即興演奏の練習場面である。なお著者は2007年頃から音楽理論の独習というかたちでジャズに携わって以来、演奏の分析や鍵盤楽器を用いた即興の練習に断続的に取り組んできた。本章におけるデータはこうした、あくまでも日常的におこなわれた活動の一部というべきものである。

本章の構成を述べておく。6.1では、本章の目的を述べる。つづく6.2では、音楽における練習のエスノメソドロジー研究を検討し、本章の課題を明確にする。6.3では分析をするための予備的な情報を提示し、分析手法を明示する。6.4では、練習において生じた演奏上の誤りとして理解可能な場面を含むデータを分析し、その理解可能性が、複数のプラクティスを通じて編成されていることを例証する。分析を踏まえ、6.5では、演奏の理解可能性が公的に与えられているということと練習という活動が備えている特徴との関係を議論する。以上の作業を通じて、6.6では、個人的な練習の理解可能性を明確にするための含意が論じられる。

第7章 結論

第7章「結論」では、本論における経験的研究を通じて得られた知見と、それが先行研究に対してもたらす貢献を議論したうえで、本論の結論や展望が述べられる。この章では本論の分析を辿り直すことによって、音楽の日常的な観察において利用されているプラクティスが言語性、日常性、そして複合性を備えていることを論じる。そのうえで本論では、そのことが既存の会話分析や演奏分析に対してどのような貢献をすることが可能であるかといったことや、日常的な観察の再特定化を遂行することによって、既存の科学的観察にどのような貢献をすることが可能であるかといったことを論じる。また最後には、本論の課題と展望が述べられる。

7.1 ではまず、ここまでおこなってきた6つの研究を踏まえた上で、本論全体の結論を提示するという本書の目的が明確化される。次の7.2では、第4章から第6章における研究の検討をつうじて明らかとなったことを検討する。そのうえで7.3では、本論における演奏分析と既存のエスノメソドロジー研究とがいかなる関係を備えているかを論じる。そのうえで7.4では、本論が提示する結論として、科学的観察と日常的観察とがいかなる関係を備えているかを論じたうえで、音楽がいかなる特徴をそなえているかについて論じる。最後の7.5では、本論がかかえる課題や展望を提示する。